

現地研修 報告レポート

アメリカで見た老人福祉

エベニーザ・ホーム・ソサエティでの実習より

昔 蕉 寂 泉

(仏教社会事業研究所員)

はじめに

エベニーザ・ホーム概要

アメリカの制度とエベニーザ

エベニーザの運営

エベニーザの特色

画一的サービスへの反省と総合的な老人サービス

実習ノートより

はじめに

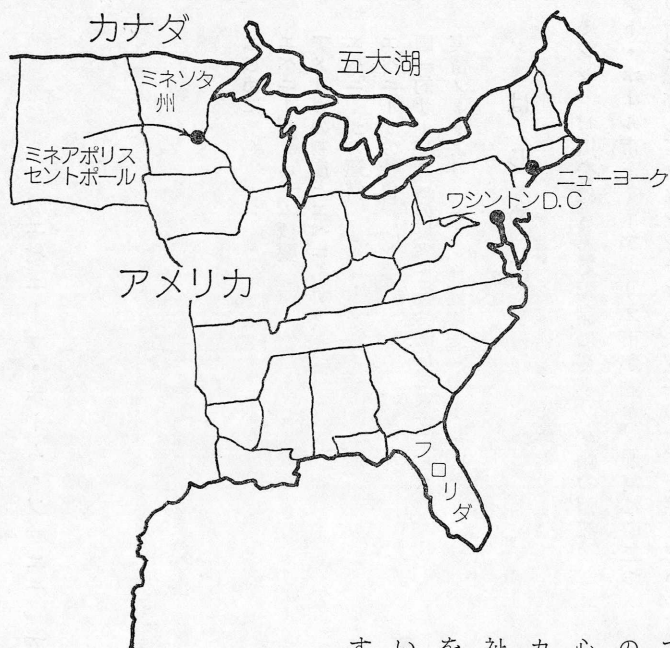
ミシシッピ川をはさんで両側にミネソタ州の州都、セント・ポール市とミネアポリス市が並ぶ、通常この二つの街を総称してツインシティー（双子の街）と呼んでいる

ます。

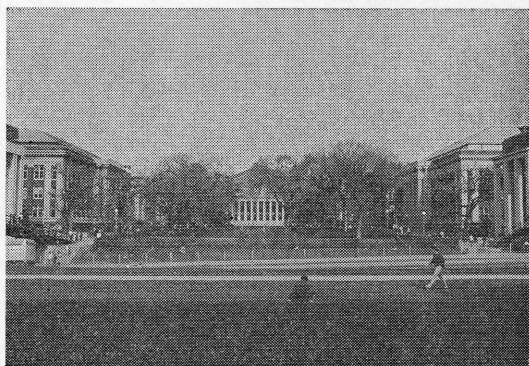
この街は別名「一万の湖の街」とも呼ばれ、市内各地にいくつもの湖があり、特に夏は木々や芝生の緑と空の青色と相交って、その美しさは格別です。

そんな美しいミネソタの地で昨年4月より約8ヶ月間に亘って社会福祉の研修に参加できる機会を得ました。

研修プログラムの名前はツイン・シティーズ・インターナショナル・プログラムで、内容はキャンパスがとても美しく、その広さは全米一を誇るミネソタ大学での一ヶ月にわたる社会福祉及び関連分野の研修と各々十週間



ではそこで
の経験を中
心にアメリ
カの老人福
社の一側面
を報告した
と思います。



ユニバーシティー・オブ・ミネソタ

エベニーザ・ホーム概要

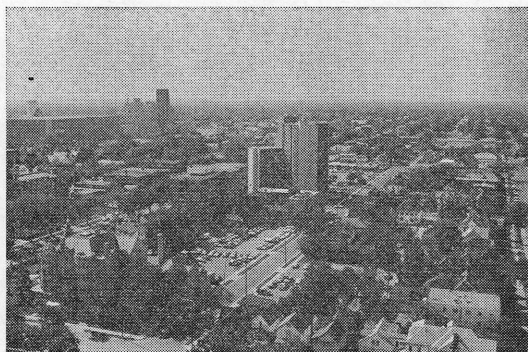
つつの社会福祉施設での実習です。

その実習の内、最初の十週間を総合老人センター、エベニーザ・ホーム・ソサエティーにて行なったのでこ

まず、施設要覧によってエベニーザの概略をみてみると、「エベニーザ・ホーム・ソサエティーとはアメリカ・ルーテル教会の46の組織によって運営される私立の無収益事業であり、チャリティによって組織されたのは古く

一九一七年にはじまる。もちろん開設当初は小さなほったて小屋にすぎなかったこの施設も現在では各種サービス施設をあわせると八五〇を越える大組織であり、アメリカでも屈指の又、ルーテル教会の組織するものとしては世界でも最大の施設に数えられる」と記されています。

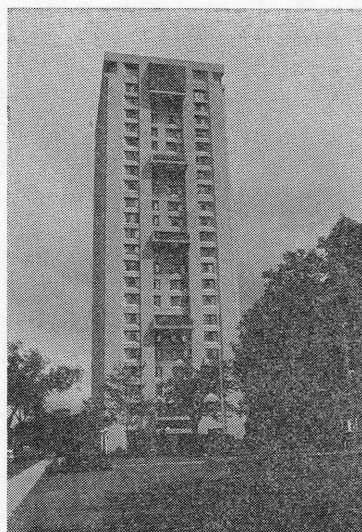
この施設に実習がきまり、はじめて訪れたのは五月の中頃でした。ミネアポリス市南26番通りとパーク・アベニューのコーナー、そこには27階建のページジュ色に塗られた近代的なビルがそびえたつ、これがエベニーザのシ



ミネアポリス市全景
エベニーザタワーより

ンボルビル・エベニーザタワーです。一見して何ら普通のマンションと変わらない立派なビル、これが老人ホームかと自分の目を疑う程です。驚いたことはこのタワーだけではなく、このタワーから南へ三ブロック、西に二ブロックという広大な土地の中に種々のサービス施設がたちならび、そこに生活する老人数は約七千という規模の大きさでした。加えることこの他にも市内、市外に数ヶ所ずつの施設をもっています。

施設の種類は日本に比較して云えば重度・軽度の特養、養護、軽費の各老人ホーム、老人アパート、地域サ



エベニーザ
シンボルタワー

ービスセンター等々、あらゆる老人のニーズに答えるべく総合的に組織されています。

さて、エベニーザは先に書いた通りアメリカ・ルーテル教会によって組織される施設です。ここでエベニーザのサービス精神についてエベニーザのハンドブックよりとりあげてみると「その基本はキリストの教えに基づくところに従って対象者に対する『愛、尊敬、理解』の三つが掲げられ、実践としての行動は日々、年々を通じての善為行であり、その為に親切でやさしい言葉と行動を実践しなければならぬ」と記されています。



エベニーザホール全景

アメリカの制度と

エベニーザ

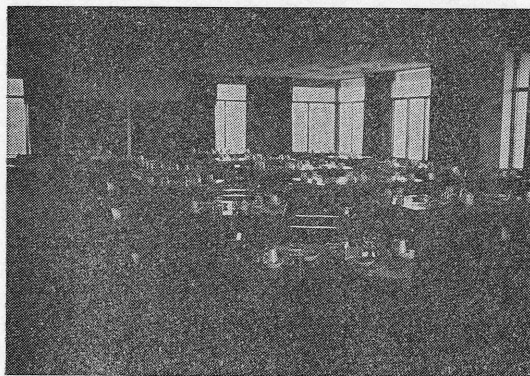
エベニーザのみではなくアメリカの場合は制度そのものが日本のそれと異なるので、先にそのことについて少しく説明してみますと、先ず日本の場合は社会福祉施設についてはいわゆる措置費・委託費（一部負担制も有）制度によってその運営が行なわれているのが通常です。その制度のもとでは民間施設は措置費又は委託費の形で国又は地方公共団体より運営にかかる費用を受取ることとなります。これに対して、アメリカの場合はこの制度とは異なり利用者が直接お金を支払い必要なサービスを購入する形式をとります。ここで利用者の財源としては個人の貯金、財産の処分の他、社会保障制度にもとづく年金が多く用いられますが、この年金が老人ホーム利用に対して十分でないか、又は無い場合は日本という生活保護費のうちメディエイド・メディケアー（日本では医療扶助）を利用してこれにあてます。実際、私がそでの実習期間中、最も多くの時間を費したエベニーザ・ホ

ール（養護老人ホーム相当）の利用者の殆どはこれらの医療扶助との併行立って施設を利用していました。

今少し、誤解を生じない為に老人ホームと生活保護受給について説明しておきますと、

老人ホームは通常ナースィングホームと呼ばれています。がこの中には大別してナースィングケア（スキルズケア）（「重度」を含む）とボーディングケアに分けられます。ナースィング

ホームとは名の通り看護及び介護を必要とする老人を対象とするものでありますから、従ってその利用者はメデイエイド・メデイケアと云う医療扶助の受給資格を所得に



タワー内食堂

よって得ることが出来るわけです。又、ボーディングケアの場合は看護・介護を必要としないが「住」の問題で老人ホームを利用する場合で、従ってこの場合はメデイエイド・メデイケアの対象とはならないこととなります。この場合は生活保護のうちの住宅扶助をうけ市のシテイハイライズと呼ばれる老人アパートに住みます。もちろん総合老人センターとしてのエベニーズもこのボーディングケアホームをいくつも経営していますが私立の場合はどうしてもコスト高になる為、一般にこの利用者は自分の年金等で費用がまかなえる者に限られてくることとなります。

しかし、実際上の問題としては何らかの身体的又は精神的理由により看護、介護を必要とすればメデイエイド・メデイケアの対象となれるので特に老人の場合は殆どこれらの受給資格をもつことが可能となり、エベニーズ他私立の施設を利用することはそれ程難しい問題とはなりません。

以上の形式をとるアメリカの福祉社会においては総合老人センター・エベニーズ・ホーム・ソサエティといっ

た私立の施設は、日本の社会福祉施設の場合とは多少その趣きを異にして老人のニードに応じたサービスを提供する一つの事業体といった方が適切な表現となります。

唯、無収益ということが基本原則であるということは一
般の事業とは異なる点です。

従って無収益に対する税制優遇措置を除いては運営管理における国からの援助は期待できず財源は専ら利用者の利用料を中心にルーテル教会組織及び一般からの寄附にたよらざるを得ません。

又、利用者とエベニーザとの関連は利用者の必要とするサービスの売買にもとづく契約関係であって、その意味からエベニーザが提供するサービスの質について利用者は非常にシビアな態度をとることも当然なことになっています。

エベニーザの運営

エベニーザでは利用者に対するサービスの提供と経営面から運営機構を次の通り分け、各々の部門は独立しています。

○ 経営面

アドミニストレーション部門

ボランティア組織部門

○ サービス面

医療サービス部門（含むセラピー他）

ソーシャルサービス部門

チャパレンシーサービス部門（教会サービス部門）

炊事食糧部門

洗濯部門

清掃部門

トランスポートेशन部門

特に説明を要しないと思われる部門については省略しますが一応、順次簡単に説明を加えると、先ず経営面では例えエベニーザは無収益といっても一つの私的事業ですから、赤字を出すことは許されません。そこでエベニーザ全体の統率者としてプレジデントをルーテル教会牧師を含んだ理事会の推薦によって専門の事業経営者の中から選んでこの任につかれています。丁度、私の実習中には前のプレジデントが引退して新しいプレジデントが

就任しました。名前をハロルド・ノービー、氏はノース・ダコタ州の出身でミネソタにて教育を終え後一九五〇年より老人福祉の分野で力量を発揮し、就任前はネブラスカ州のタビサ・ホームのプレジデントを勤めていたこの道の事業経営者としてのベテランであります。そしてそのプレジデント・ノービー以下各施設にやはり経営担当の専門家を配置し施設単位での事業の企画・運営にあたらせています。

ボランティア組織部門・ボランティアはアメリカの社会福祉において非常に重大な役割りを果たしています。このことは過去幾度となく諸々の文獻に紹介されています。そしてボランティアは経営面にとっても大きなプラスの要因となっています。実際アメリカの施設経営については公私とも必須の条件といっても過言ではないと思われる程です。

ところでこの地ミネソタについては特にそのボランティアの活動が盛んと思われれます。というのは夏には美しいこのミネソタの地も冬には厳寒の地に変わります。その緯度は日本の北海道に同じ、加えるに、内陸性の気候

と相まって零下20℃まで気温がさがるといいます。そんな自然条件は人々の中に相助の精神をうえつけたと思われれますし、又、このミネソタを中心とするアメリカ中西部はミッドウェストと呼ばれ宗教的にはホーリーランド（聖地）として開発が進められたところです。

特に中心都市のうち、ミネアポリス市はルーテル教会、セントポール市はカトリック教会がその勢力をもち、人々の信仰心は厚く、アメリカでも有数の信仰地であります。もう一つ、ミネソタはアメリカ全土としては比較的遅れて開発されたところでその移住者は多くノールウェー、デンマーク、スウェーデンといったいわゆる北欧先進社会福祉国家からの出身者でしめています。従って社会福祉に関しては人々の関心は非常に高く、事実全米でも最も高い水準をしめています。

以上、話が少しわき道へそれましたがミネソタにはその文化の中にボランティア精神がつかわれる条件がそなわっており、老人から子供まで自分出来る範囲でこれに参加します。

又、ここでのボランティアは特に難しく考えるもので

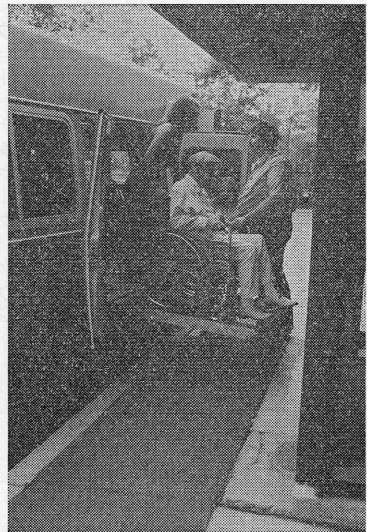
はなく何でもない日常的な活動、例えば老人の散歩につきあうとか、話し相手になるとか、買物につれていく等等が實際上役に立っているのだというのが印象です。

又、エベニーザの場合はその組織基盤がルーテル教会であることから、更に教会を通してのボランティアを得るのに好都合であります。

サービス面について医療部門、炊事、洗濯、清掃部門については特に説明は要しないと思われます。トランスポーションについては自動車が車椅子每乗れる特殊車である為、専門の運転手を訓練してこれにつかせるます。

アクティビティーは日本でもよく行なわれているいわゆる余暇活動ですが、ここでは他の職員が片手間に行なうのではなく、これも専門家がその任にあたっています。

さて、チャパレンシーサービス部門がありますが、これはソーシャルサービスが利用者のソーシャルな部分に對して対応していくのに対して利用者の心（魂）に関する問題について宗教的見地からこれに対応していく部門



車椅子ごとのれる特殊改造バス

であってルーテル教会の牧師及びシスターがこれに配属されています。

これについては後にももう少し詳しく見てみたいと思いますがここでは運営面からこれを含めてまとめてみたいと思います。

エベニーザは先にも書いた通り、その組織基盤をアメリカ・ルーテル教会組織にしていますが実際の運営にあたっては各部門独立で各々その道の専門家を配しています。それはプレジデントとしての経営の専門家でありソーシャルワークのためのソーシャル・ワーカーであ

り、医療のための医師であり看護婦であります。そして対象者の心（魂）の問題に対応していく専門の部門がチャパレンシーサービスです。

更に各専門の部門は専門領域としてお互いを認めあい、お互いに干渉するのではなく協力しあって問題解決にあたっていくのです。

エベニーザの特色

エベニーザのハンドブックによると「人は皆神の愛によって創造された個々人であり、生涯において、physically（身体的）、emotionally（感情的）、Spiritually（精神的）に満足感が予定されているものである」とあります。

更に、それをうけて「エベニーザには神と同胞へのサービスの為に個人のもつ潜在性と能力を認め個別的ニードにあったサービスのできる限り豊かにし個人をとりまく変化と状態の過程をうけ入れる雰囲気と環境、設備をととのえることが使命として要求される。」としています。

今、ここでエベニーザの利用者に対する処遇について、その利用者を捉える態度としては身体的、感情的、精神的の三つの側面をもってトータルなものとし、加えること個々の利用者は個々別々のニードをもった違った個人であって、その個々の特性にあった個別的なサービスを提供してこそその本来的使命を果たすとしているのです。

ここで身体的、感情的、精神的の三つの側面についてはじめに説明したいと思います。

まず「身体的」と「感情的」の前二者ですが、これらは特に説明するには及ばないことですし、特にエベニーザの特色という程のものではありません。ただし、強いて述べるならばそのサービスの質でしょう。これは先に述べたように各サービス部門が独立、専門化している為に徹底したサービスが提供できるということです。

しかし、三つ目の「精神的」についてはエベニーザの特色をはっきり表わすものとしてここでとりあげてみる必要があると思われます。

必ずしも精神的という訳語がここで正しいとは思われ

ないのですが、ここでの精神的とは身体に対する精神というよりはむしろ、心の魂に関するものを精神的と呼んでいます。つまり、宗教的な色彩をもった心の救いの問題こそ、このスピリチュアル・ニード（精神的要求）なのです。

さて、このスピリチュアル・ニード、当然アメリカにおいて信仰の自由は保障されているわけですから、宗教的色彩の強いものを利用者に強制することはできません。しかし、一方では利用者は逆にスピリチュアルなニードをもち、そのサービスを期待しています。

実際老人のスピリチュアル・ニードについてはエルドマン・パールモアの調査結果の中から「宗教についての態度の項目について人生の終末のアプローチとして殆どの老人の主題から宗教はより明白な意味をもち、特にその傾向は動けなくなった人にとってはさし迫ったものである。なぜなら、彼らは宗教の慰めと安楽によりせっきんしたがるようになるからである。」と述べていますし、特に老人ホームのような長期にわたる収容施設ではこの必要性は大と考えられています。事実、殆どの施設

でこのスピリチュアル・ケアは利用者の権利として認められるようになってきています。

エベニーザについては先に書いたチャパレンシーサービス部門がこれにあたっています。

チャパレンシーとは礼拝堂勤務の牧師を意味する言葉で、もともとエベニーザの中にある礼拝堂で教会サービスを行っていたわけですが今では利用者の一人々々を対象として心の悩みに関するカウンセリングを行なうと同時に動けなくなつて礼拝堂までこれない利用者に教会の出張サービスを行う一つのサービス部門となつて



チャパレンシーサービス
カウンセリングの様子

います。

このサービス部門は宗教を媒介とするものであるから特にそのカウンセリングにおいては何かれなく悩みをうったえることができ、その為に利用者にとっては好評であります。と同時にルーテル教会を基盤とするイベントにおいてその宗教的特色を出すという点からして非常に意義あるものと受けとれましたし、又、宗教と社会福祉のあり方についての一つの方向性を示すものとして興味ある点であったといえます。

次にもう一つの特色をあげてみたいと思います。それは個人の特性にあったサービスの提供と個人のもつ可能性の追求ということにあると思います。

この特色の説明についてはアメリカ文化の底流にあるアメリカ的個人主義があると思われます。

個人主義とは「個人を出発点及び目標とし、これに必要な意義を認める制度、個人の福祉の増進と素質の十分な展開とを目的とし、社会、国家を単に個人の集合と考え従ってそれを個人的目標達成のための手段とみなし経済生活の形成を出来る限り個人の自由活動に委ねること

を本旨とする。ルネッサンス及び宗教改革期における個人的・人格的価値の自覚、社会の資本主義化の進行に伴って徐々に抬頭した（広辞苑―傍点筆者）」と説明されます。

そしてそれは、事実アメリカ社会の中に生活してみて、生活のすみずみに強く作用していることを感じました。

読本「アメリカ人と日本人」の中で著者、尾崎茂雄氏はアメリカの高離婚率をこの個人主義の功罪としてだれにでも解り易く説明していますし、その他諸々のアメリカ紹介文には必ずといっていい程、このアメリカ人の個人主義やその功罪について著しています。

さてその個人主義、多くの功罪をアメリカ社会に産み出していることは事実としても、その目的は先の説明の傍点部分「個人の福祉の増進と素質の十分な展開」にあるといえます。そしてそれは施設におけるサービスの展開上「個々人の尊重」という意味において重要なファクターをもっているということも考える必要のあることです。

先の実習施設エベニーザの場合をみて、「個人のもつ潜在性と能力を認め個別的ニードにあったサービス……」がその提供目標となっています。

画一的サービスの反省と

総合的な老人サービス

この個々人とその能力の尊重についていまだし具体的に述べてみたいと思います。

アメリカにおいても老人学そのものは決して永い歴史をもって研究されたものではありませんし、まだ試行錯誤のくり返しですが既に人口の10%をしめ、今後も急増する老人人口に対応していくことが急務とされています。

この点について単に法律面から見ると日本は老人福祉法はアメリカの制度に比べて一歩も二歩も先んじているといえるでしょうし、加うるに、日本の扶養制度については現在アメリカでも研究が進められています。*

しかし、施設ケアについてはどうか。もと、同居を良しとしない風習をもつ西洋文化圏におい

て施設ケアは必須の条件でありますし、又、先にも書いた様に日本に比べて有料施設的な性格をもつアメリカの施設においては利用者はその提供されるサービスに対してシビアな態度をとることも事実です。

そのような状況の中で今までの施設が老人を画一的にとらえ、画一的サービスを提供してきたことに対する反省がはじまりました。そして、あくまで老人を一個人としてとらえ、潜在する可能性を追求して、最終ゴールを地域社会への復帰においたことは大変興味深いところです。

画一的な理解においては個々人をとった場合、過少、過多サービスに陥り、個人のもつ潜在的な可能性を崩壊されると同時に、一方においては必要に對して十分でないサービスとなり、目標となる地域社会への復帰が遠ざかる結果となってしまいます。

各々一個人のニードは特殊であり、それを尊重し、それに対応して、個人にあったサービスを提供してこそは

*What Can the U. S. A. learn from Japan about Aging
Erdman Palmer The gerontologist

じめて施設は施設としての機能をまっとうしたと考えるのです。更にそのためには施設が施設内サービス提供機関にとどまることを許されず地域サービスセンターとして社会復帰後の老人のニーズに答えるべくその機能を拡大していく必要にせまられてきます。

エベニーズではその意味から別に地域サービスセンターを設け、そのニーズに応えるべく、看護婦、ホームヘルパーの派遣、デイセンターの設置、法律的保護相談、友愛訪問サービス、ボランティア派遣サービス、チャパレンシーサービスの各サービスを提供していますし、又、更に特殊なニーズについては専門的知識を有するボランティアを起用これにあてている他、ルーテル教会の基盤を通してその教区牧師により、より密接な連絡、サービス網を展開しています。

このように個人を単位として、個人個人にあったサービスを個人の尊重とその可能性の追求の上に展開していく、更にそのために出来る限りの社会的資源を開発、活用していくそれがエベニーズでの実習を通してアメリカでみた老人サービスの一側面でした。

実習ノートより

以下、エベニーズでの実習の一部を拾いだしてつぎに紹介してみましよう。

エベニーズ・ホールにて

六月三日

実習初日 六月新規採用者約20名とともにエベニーズについてのオリエンテーションをうける。職種は多岐にわたるが新採用者は非常に若い。

全体オリエンテーションの後、各スパーバイザーのもとで指導をうける。

職種内容が専門分化しているため、理解にとまどう。

インテークの担当ワーカーから入所についての説明をうけるがこのワーカー年令22才というお嬢さんには驚いた。

六月四日

この日はミーティングデーである。

内容は情報交換、新入所者について、90日毎のケ

スミーティング他。

ミーツィングの多さには閉口する。

六月七日

昨日来の雨で一部居室が雨もり。

早速老人の苦情、「何故、入室前に処理をしておかなかったか？」修理の間の代替部屋を用意するがこの説得にひと苦労。

六月十日

部屋替えはソーシャルワーカーの大きな仕事の一つである。部屋は値段（利用料）によって変わる。この間に問題がおこらないのはいかにもアメリカ的で他人を干渉しないからであらう。

新入所者アルファ（女、年令七十八才）が来園。前に住んでいた家がとりこわしのために入所を決意したとのこと。非常に頭の中が混乱しているらしく拒絶反応を示す。スーパーバイザー・ジョイスの判断により時間をかけての説得にかかる。

六月十五日

アルファは落ちつき逆に喜んで施設生活をおくる

ようになる。

ジョージ（男、年令八十六才）は殆ど寝たきりとなり、エベニーザのフランクリンビルに入所中である。かつて老いて結婚したエミー（女、年令七十六才）と二人でエベニーザホールで暮らして、ジョージの年金でエミーをみていた。病状が悪化したジョージは自分の世話のためにエミーにフランクリンへ変わるようワーカーを通じて頼んでくるがエミーはそれに応じず今までのところを動かうとはしない。エミーの意志に反して施設側がどうこうすることとは云えず困っているところへ、ジョージの甥が現われジョージをひきとりたいとのこと。今度はエミーの生活保障責任について問題がでる。結局エミーは生活保護を受け、一人継続入所、ジョージは甥のもとにひきとられることとなった。

六月十八日

ディスチャージ・カンファレンス

地域社会に復帰のための退園老人2名についての会議。その会議には本人も加わる。会議というよりも

むしろ激励会で看護婦はじめ各部門からの注意事項及び地域サービスセンター利用等に関する説明の他なごやかな雰囲気で終始する（会議の二日後八十を越える二人の老婦人は自分で車を運転して老人アパートに移っていった）。

六月二十日

新プレジデント就任のあいさつ

あいさつに引続いて老人より活発に苦情と要望が出される。その場で新エレベーターの設置についてプレジデントより確約をとることとなった。

六月二十五日

ワーク ショップ

エベニーザの教育研究部門によってワーク、ワークショップがもたれる。これは実践的な処遇研究に関する研修会でこれを受講した者には受講証明書が発行される。これ以外にも種々の研究発表会がよくもたれ各々自分の研究についてお互いに評価し合い実践に役立てている。

六月三十日

ボランティアオリエンテーションに参加。このボランティアは夏期休暇中の児童によるもので各々車椅子押しや、話し相手散歩や買物の世話をするボランティアであった。夏休みには全く教育の圧力のかからないアメリカの児童にとってこのボランティアの経験は社会学習において重要なものとなろう。

六月二十日

ソーシャルサービス部門を一時中断してアクティビティ部門に参加してみた。

日本で行なわれている趣味活動についてはそれ程活発さは見られない。しかし、討論のグループがいくつも組織され、社会事象から料理の献立てに至るまで常に活発な論議が行なわれている。

「我々は年令80を越えるが、それだけの理由で差別されることはない。もっと何にでも参加していくべきだ」というていた老婦人が印象的であった。

コミュニティサービス・センターにて

七月十日

デイセンターをオブザーブする

デイセンターはエベニーザの施設の一部にあり各所から集まった老人が一日を過ごし又、自分達の家に帰っていく。

ここには種々のプログラムがくまれているが先ず問題となるのはデイセンターへの交通の便である。ここで用意されているのは2台の特殊バスで車椅子ごとドアからドアに動けるようになっていて朝八時より各家々を周り夕方同じように自宅までおくり返せるようになっていた。

七月十一日

シニア コンパニオンプログラムに参加。

これは一人暮らしの老人を他の老人がおとずれる友愛訪問でこの日はエール老人の車でビルを訪れる。

ビルはイギリスからの移民者で他に見寄りはなく、このエールの訪問を心待ちにして喜んでいる。訪問者エールにとってもビルは今では大の親友となりお互いの昔話に話が咲く。

七月十七日

看護訪

問。看護

婦ジェン

とともに

交通事故

にあった

一人暮し

の老人シ

ュナイダ

ーを訪れ

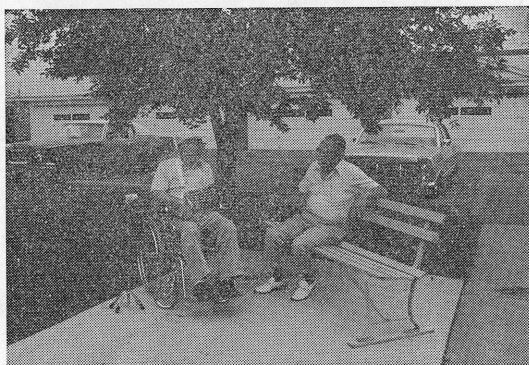
る。ここ

では傷の手当ての他、日常品のちょっとした買物といったホームヘルパーの仕事も要求される。

七月二十日

ホームメーカーサービスへの参加

三人の老人を訪れるがうち2人は市のシテイハイライズ老人アパートに住む。規定では一応健康老人となっているが2人とも病床にふしていた。日常品の



シニアコンパニオン・プログラム元氣な老人エール78才が病氣のビルを訪問家の前の庭にて

ここに報告レポートいたしました。

買物のあと入浴させるが夏の暑いきりエアコンのないしめきった部屋で大きな体のアメリカ人を入浴させるのは大変な仕事である。三人目は老夫婦の二人暮し、ホームメーカーのボブが病気の主人を入浴させるが夫人は何知らぬ顔で手伝おうともしない。既にそのサービスを購入しているのだからそれが当り前なのかも？

おわりにかえて

エベニーズでの十週間の実習 総計して8ヶ月のアメリカでの研修は私にいろいろなことを教えてくれました。

社会福祉の有様は各々の国のもつ歴史や文化によってもその展開上に差がでてきます。

アメリカだから、イギリスだから良いということはいえません。しかし、学ぶべきところはどんどん学び、そこに日本独特の形をつくっていくべきだと考えます。

帰国後間もない私にとって今までの経験を十分にまとめることはできませんがとりあえず印象深いところをこ